

加藤 博

ディシプリンとツール

私は方法論的オポチュニストを任じてきた。実際、これまでの私の研究生活は、幸か不幸か、偶然が重なった多くの「出会い」のなかで、歴史書、法令、文書、聞き取り情報、統計データ、地理情報と、異なる種類の資料を渡り歩くものであった。そして、その結果として、次の二つに確信を持つようになった。

ひとつは、こと学際的な研究のうえでは、どの種類の資料も一長一短があり、その強みは同時に弱みであるため、資料の研究上の優越を競い合うことは生産的ではないということである。もうひとつは、そのため、学際的な研究のために、異なる種類の資料の突合せを必要とするが、それは諸科学のディシプリンではなく、語学、現地調査、数学、統計・地理情報処理・解析などのツールの共有によって可能となるということである。

このように述べると、「それはお前が特定のディシプリンに習熟しないディレッタントだからだ」という批判が返ってくるに違いない。このような場合、私は歴史学徒であり、先の主張は、資料がいつ、どこで、誰が、何を目的に作成され、なぜ今日まで残されたのかを検証する、歴史学で言うところの「文献考証」に基づくものだと答えるようにしている。

私が「地域」にこだわるのも、地域研究がひとつのディシプリンであると考えからではなく、空間が時間と並んで、学際的な研究対象たらざるを得ないと思っているからである。そして、学際的な研究を目指す以上、先に述べたように、異なる種類の資料に基づく研究成果の突

合せを不可欠とするであろう。

学際的な研究の必要が叫ばれて久しい。しかし、それは、ディシプリンにこだわっている限り不可能であろう。重要なのは、さまざまな種類の資料の収集であり、ディシプリンを異にする研究者に利用可能な形で資料を処理する専門的技術である。そこには、高度なデータ・情報処理のツールのほか、図書館、文書館の運営方法も含まれる。現在では、文献や統計のみならず、地図や写真などの映像資料や音楽も、重要な研究对象となつている。また、それらの資料のデジタル化も驚くほどの速いスピードで進められている。

データのデジタル化は、研究者の研究姿勢や研究方法の変化をもたらしている。学術論文やワーキングペーパーはネット上の検索で容易に入手できるため、研究者は時間の多くをそのサーヴェイに割かざるを得ない。また、彼らは、生のデータ・情報を自ら収集し、処理する時間を持つて、何らかの形で「加工された」データや情報に依存せざるをえなくなっている。

いまや、データや情報をどう所蔵するかの時代から、どう利用するかに移っている。一体、この先、研究環境と研究方法はどのように変わっていくのだろうか。ITに弱く、アナログ世代の私には想像もつかないが、日本がデータ・情報の管理において、欧米に比して大きな遅れをとっているのではないかとすることは、この私でも分かる。発想を転換し、がんばってもらいたいものである。

かとう ひろし／一橋大学大学院経済学研究科 教授

1948年生れ。一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了（経済学博士）。専攻は、アラブ社会経済史。

近著に『イスラム世界の経済史』NTT出版、2005年、『イスラム経済論 イスラムの経済倫理』書籍工房早山、2010年がある。